

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。

この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

**II 9月の新聞記事に見る「北海道の熊問題」について**

その①(朝日新聞 9/2 付、「知床ヒグマ出没激減」)の記事-----「目撃件数、昨年の3分の1。知床国立公園全体でも目撃件数は3分の1以下だ。平年と比べても、やや少なめで、知床財団では「あまりにも極端」と首をかしげている」と言う内容。しかし、昨年だけで、知床(斜里、羅臼両町)では、67頭もの熊を危険だとして、殺しているのである。これだけ殺していながら、「出没が少なくなったことが不思議だ」など、空々しい限り。世界自然遺産の指定で、本来の熊の利用地付近まで多くの人間が行き、そこに熊が出て来て危険だとして、熊を殺している現実。皆さんはどう思いますか。

その②(北海道新聞 9/4 付、「管内(石狩管内の事)クマの出没激減」)の記事-----「熊研究者の道職員の間野勉は、昨年出没した若いクマが人間を怖いと感じる経験をして、現れなくなったからではと推測する」と言う内容。これに対する、門崎允昭の見解は、「札幌市で2011年に円山等に、そして2012年に藻岩・川沿・真駒内などに夜出て来た熊は、母から自立した若熊(自立するのは、5月から8月の間である)が、母から別れたことで、新たな生活圏を確立すべく森林を探索徘徊して(これは本能的な行動である)、林地の端に来て、そこに人家があるのを見て、好奇心を起し、学習に出て来たもの。そして、納得すれば山に帰るし、今年は9月

4日時点、その種の熊がまだ現れないだけである」と言うもの。

その③(道新9/27・朝日9/25 ヒグマの足跡発見、「すずらん公園で来園内者6千人避難」)の**記事**——「札幌市南区の国営滝野すずらん丘陵公園で23日午後2時ごろ、園内を巡回していた職員が熊の足跡と糞を発見し、約6千人の来園者が避難した。同園は30日まで臨時閉園し、さらに2週間閉園し期間中のイベント中止も決めた」と言う内容。園は開発局の所管である。熊侵入防止柵として、2億円も掛けて、目幅5cmの金網を高さ3.5mで7.4km張ったが、効果が無く、門崎の助言で金網の上に地上1.5mから上部に10cm間隔で有刺鉄線を張り有効化した経緯がある。今回は民間の調査機関に依頼し、まだ熊が侵入した場所も、熊が園外に立ち去ったか否かも特定し得ていないとの園所長の話。園の外側の南部と南東部は熊の行動圏である。

その④(新聞各紙、道新は9/20、トングリ(ミズナ)凶作・熊出没増える・道が予想)の**記事**——以下は門崎の見解。トングリ今年凶作は誤りである。門崎の調査ではトングリ類(ミズナ・カワ・コラ・バナ)は今年決して凶作ではない。平年並である。バナは豊作と言う記事もある(道新9/21)

その⑤(新聞各紙9/25)函館市女那川町の林道沿いの河原で、山ブドウ採りの同町の無職山本忠・勝さん(62)が24日午前9時半ごろ、母子2頭の母熊に襲われ、後頭部咬傷・右肩と右足に爪傷を負ったが、棒を使って抵抗すると熊は立ち去ったと言う。母熊は子を守るために襲って来たもの。熊に襲われた場合、積極的な反撃が有効である事を証した事例となり、幸を奏した事例である。道内で今年起きた熊による人身事故は、4月16日に檜山管内瀬棚町で女性が襲われ死亡、同29日には日高管内静内町で男性が負傷しており(会報8・9号参照)、本件は3件目。

その⑥(新聞各紙9/27、9月27日金、子熊1頭を駆除)の**記事**——

27日午前8時40分頃、札幌市南区真駒内柏丘12の定鉄バス石山陸橋のバス停付近の林で、若熊1頭が居るのを駆除した。体長1.1m、雄熊と言う。以下は門崎の見解。熊は1歳8ヶ月令(熊の年齢は2月1日を誕生日として計算する)この7、8月に母から自立した個体である。この個体も一昨年(2011年)と昨年(2012年)に、南区や西区の住宅地に頻繁に出て来た個体同様、母から自立させられた若熊が、「住宅地が如何なる所か」好奇心で学習に出て来ていたのであった。迷い出て来たものでも、餌不足で食べ物目当てに出て来たものでもない。2歳未満の野生の熊が、人を襲った事例は私が熊を研究して来た過去45年間全く無く、今般の熊は殺すべきでなく、山に戻るのを見守るべきであった。無知がなせる悲しい顛末で、私は怒りを感じる。

「子熊とは母熊同伴の場合を言い、自立した満1、2歳熊は若熊と言う」。

動物管理担当課長 白鳥 浩二 様 熊対策として、下記の二点、特段のご配慮をお願い致します。

1：これから晩秋にかけて、作物の被害予防のために、熊の捕殺が増加する時季ですが、過日、文章で、お願いした通り、一時的な電気柵の設置で、被害を予防し、極力、捕殺しないよう、ご指導方、お願い致します。2：北海道熊研究会会員から「日没間際に、熊が出没しているとして、銃器をもって、巡視している地所があるので、道の担当課に対し、間違っても日没後は、発砲しないように、関係者に改めて、指導徹底方、申し入れるべきとの要望」がきましたので、会として、この件について、特段のご配慮をお願い致します。 2013年9月8日 (丁)